トミと一緒に

ナヲは佐野から留萌に来た時に３人の子どもを連れてきました。

しかし、蓼沼の本家ではナヲが頑張っているが、生活にずいぶん苦労していると聞き、子どもがかわいそうだといって、２人を父である勘七のもとに連れ返しました。

末っ子のトミだけは、まだ５才と小さかったので、ナヲの元に残しました。

大正２、３年の頃、ナヲが増毛や旭川に教えに行っている間、ナヲの父と母が留萌に来て、トミの面倒を見ていたといいます。

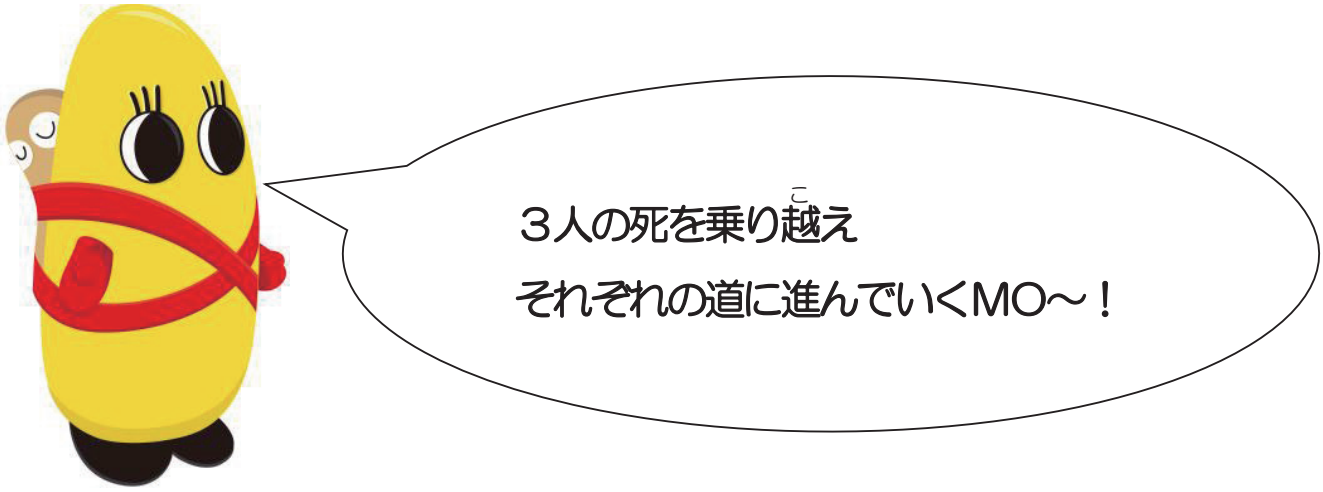
ナヲはそんな中でトミを育て、トミもその期待に応(こた)え、大正15年（1926）には小学校の先生となり、昭和16年（1941）まで続(つづ)けます。

昭和２年(1927)にはトミに増毛(ましけ)の舎熊(しゃぐま)から和田岩太郎(わだいわたろう)を婿養子(むこようし)に迎(むか)え、２人の孫(まご)も授(さず)かりました。

大正時代の茶会

しかし、悲劇(ひげき)は突然(とつぜん)訪(おとず)れました。

昭和６年（1931）トミの夫(おっと)岩太郎(いわたろう)と２人の孫(まご)は亡(な)くなります。この年は、インフルエンザが日本中に蔓延(まんえん)し、全国で15，000人以上(いじょう)が亡(な)くなりました。

ナヲとトミの悲しみは大変(たいへん)なものだったでしょう。

ナヲとトミは悲しみを忘(わす)れるべく、いっそう茶道の道と教師(きょうし)の道に進んでいったのです。